

下伊那の植物に思う

奥原弘人

H. Okuhara : Notes on Plants in Shimoina

10年ほど前、遠山谷を車で縦走したことがある。その時遠山川の河原にフサフジウツギらしいものが群がって開花しているのが見えた。5年ほど前に大河原に泊まった時、小渋川の河原に点々と開花していたのは正にフサフジウツギ(チチブフジウツギ)であった。昨年は小渋ダムの道端でも点々と見えた。これによって遠山谷のものもフサフジウツギであったことが推定出来た。

この低木は中国原産というが、その広がり方は正に帰化植物そのものの殖え方である。下伊那では今後更に北へ南へと分布を広げるであろう。

これを見て記憶を新たにすることがある。野帳を調べて、それは1963年のことと分かった。木曽の植物を調べていて日義村東部の山中にある野上という小部楽の奥約1kmの川端で見たのを野帳にはウラボフジウツギ10本としてある。その頃は牧野図鑑によってフサフジウツギをこのように思っていた。こんな山奥にと不思議に思ったのであった。附近にはミヤマツチトリモチ・ホソバツルリンドウもあったが、それから奥は獣道で熊の住みかかと知っていたので深入りは思いとどまった。

その翌年であったか上松町東部の東小川地区で民家の点在する附近でも、これを見た。民家とは関係ないような所ではあったが、植えたのであろうと思った。木曽のこの二ヶ所は折があったら行って見たい。

イナトウヒレンは下伊那特産というが、そこでは多数群生していて驚く。それに反しホクチアザミは全滅に近い。1931年下伊那教育会の調査委員は根羽村の県境にある丸山へ調査に赴いた。草原に獣道のような道が頂上に向かって通じていて、それを上下したが、若造の私には初めて見るキクアザミとホクチアザミが珍しくて一行に後れながら見て歩いた。すると葉の形はキクアザミのようであるが裏面はホクチアザミのように白いのが見つかり宿舎で広げると3本採っていた。講師の小泉秀雄先生はこれは雑種であるからホクチキクアザミと呼ぶこととすると1本を野冊に納められた。

‘下伊那の植物上巻’を執筆した村松光喜氏も同席したが、この事は記事となっていない。これは同

氏が軽く見たからであろう。残りの2点の中、1点は下伊那教育会に納め、他の1点は後に信大の標本室に納めたが、今これらを捜し出すことは容易でないためらっている。何年か前杉本順一先生からお便りがあり、村松氏から同定を頼まれた下伊那教育会の標本の中にホクチキクアザミが交っていたと連絡して下さった。

近年ホクチアザミを見ようと今井さんの協力で何回かあの辺を廻って見た。ようやく二ヶ所で少しずつ見ることが出来たが、村人の話では昔は沢山あって餅につきこんで食べたが今では仲々見つからないとのことであった。根羽村の県境寄りの山地は今、杉の植栽地になっていて30年くらいの杉が立ち並び林下には椎茸のほだ木が一面に並べられている。これだけの数のほだ木はどこから来たのかと驚くばかりであった。この杉林の中に林道が迷路のようにつけられていて、ホクチアザミはこの道端にようやく残っていた。この辺昔は草原か雑木林であったであろう。これでホクチアザミの少くなった理由が分かったように思えた。

昭和の初年頃、飯田市附近の草原ではヤマジノギクが各地で見られた、中には舌状花が管状になったものもあって小泉先生がクダザキヤマジノギクと呼ぶこととしたが、近年これが少くなったとの話があり、昨年伊藤文男さんのお世話で喬木村と豊丘村の二ヶ所でようやく少しずつ見ることが出来た。私の高森町での採品も信大にあるが、教員子達の話では下伊那でも開発が進んで昔の草原は残っていないとのことであった。

1975年秋私は小渋川の下流で1種の野菊を見つけた。36災害で大西山から押し出した土砂が積ったらしく広い河原が台地状に広がり、その小石がごつごつした河原に野菊が広く一面に花を開いていた。高さ50cmくらい、葉は線状で幅4mmくらい。関東地方に分布するカワラノギクに似ているが、カワラノギクは高さが高く、枝の葉は密についていて小さい。

この野菊は下伊那に分布するヤマジノギクの変りものと思われ、舌状花の冠毛の不完全な点でも似ているが、河原に生えることと茎葉の狭く小さい点で異なる。花には変化が著しく、舌状花が白色のもの、

管状のもの、下部まで3~4全裂のもの、下半部が筒状で上半部は3~4裂のもの等。

その後も観察を続けてきたが、この台地状の河原に樹木が生長して森林となったので、野菊は林縁や出水すれば水をかぶるような所にだけ残っているの

〔植物ニュース〕161. ウスユキマンネングサ *Sedum hispanicum* L.

欧州・小アジア原産の帰化植物。本来は栽培品であるが、河川の石垣に生えていた。1991年8月4日、松本市巾上。県下初採。(横内文人)

〔植物ニュース〕162. オキジムシロ *Potentilla supina* L.

欧州原産の帰化植物。キジムシロに良く似ているが、本種の小葉は羽状に分裂し、葉面に光沢がある。花卉は黄色で長さ2.5~3mmである。1991年8月4日、松本市島内。県下初採。(横内文人)

〔植物ニュース〕163. コウリントンボボ *Hieracium aurantiacum* L.

欧州原産の帰化植物。一名エフデギク。茎や葉に豪毛がある。花は舌状花のみで橙赤色。鑑賞用として明治中期に渡来。登山道脇に5株生えていたが、登山者によって侵入したものであろう。1991年7月21日。松本市鉢伏山。県下初採。(横内文人)

〔植物ニュース〕164. コゴメバオトギリ *Hypericum perforatum* L. var. *angustifolium* DC.

欧州原産の帰化植物。茎の高さは60cmもあり、節ごとに短い枝を出す。黄花を咲かせる。1991年8月4日。松本市島立。県下初採。(横内文人)

〔植物ニュース〕165. シロバナヒレハリソウ *Symphytum officinale* L. form. *albiflorum* SCHUC.

欧州原産の帰化植物。ヒレハリソウの白花品。1991年9月16日。松本市島立。(横内文人)

〔植物ニュース〕166. セイヨウオオバコ *Plantago major* L.

欧州原産の帰化植物。本種については本誌(24:35)に報告したが、松本市内にも見られた。大型のオオバコであるから、注意すれば各地で見つかるものと思う。1991. 9. 16. 松本市島立(県下2例目)。(横内文人)

〔植物ニュース〕167. オオキンケイギク *Coreopsis lanceolata* L.

長野道ののり面に逸出した本種が多く見られる。舌状花は橙黄色であるので遠くからでも良く分かる。1991年8月5日。松本市島立。北米原産。

以上の標本の一部は神奈川県立博物館の高橋秀男先生にご同定戴きました。(横内文人)

を見て残念に思った。

これはヤマジノギクの新変種であるとしてイナカワラノギクとしたい。更に花の変りものにはシロバナ・クダザキ・シデザキなどの名を冠して新品種としたい。

〔新刊紹介〕岩槻邦男編集・執筆「日本の野生植物—シダ」四六倍判、320頁、カラー写真192頁、平凡社。1992年2月4日発行。定価19,500円。

本書は「日本の野生植物」シリーズの一冊としてシダ植物をまとめたものである。

まず最初にシダ植物の定義や特徴にはじまり、生活環、内外部の形態的な解説、シダ植物の変異と種の分化、系統、シダと人間生活に至るまで細部に亘って解説をして、初心者にもわかり易く執筆されている。

そして、琉球・小笠原を含めた日本に自生するシダ植物のすべてをとりあげて、科・属・種を検索するための、それぞれの階級に応じた検索表をつけ、それぞれの種について記載がなされている。またほとんどの種について 鮮明なカラー写真がつけられており、胞子嚢群や鱗片などの拡大写真もついていて検索表や解説だけではわかり難い点も充分補われている。

執筆は全体的な広い視野から岩槻教授によって行われているが、掲載されている写真撮影は、プロや日本シダの会の皆さんなど大勢で行われている。その中には本会々員も石沢進・大場秀章・堤久の各氏をはじめ何人かが加わっている。このすばらしい写真を見れば、シダを知らない人でも実物を見たいと思わずにはいないことだろう。そして、この多数の図版は最初の総論的な解説と共に、はじめてシダに接する人にとって適切な入門書となることだろうし、日本のシダのすべてを含めた解説は専門家にとっても適切な手引書となることだろう。

このように、シダ全般を適切に一冊の書にまとめた著作は極めて稀だろうと思う。本書を手引きとして多くの人がシダに親しみ、本当にシダを愛して自然環境を保全していけることを希うものである。最近安価な図鑑類で珍品稀種を掲載して、徒にそれらの乱獲を促すはたらきをするような書を見かけるが、本書の総論部分をよく読まれて、それらの書に感わされないようにして頂きたいものである。

以上のような意味で本書は専門家はもとより広く一般の人にもお奨めしたいものである。(S.S)